

ギルバート先生を偲ぶ

まったく思いもかけずリンダ・ギルバート先生が突然お亡くなりになり、大妻比較文化学部の紀要第2号をギルバート先生追悼号として、霊前にお捧げすることになりました。

リンダ・キャロル・ギルバート先生は、1945年アメリカのお生まれで、カリフォルニア州立大学ドミンゲスヒルズ校で人文学修士号を取得。昭和55年から日本で教え始められ、NHK講師、慶應義塾大学非常勤講師等を経て、平成4年に大妻女子大学短期大学部実務英語科専任講師として着任。平成9年に助教授となられ、平成11年4月から平成12年12月まで、新設の比較文化学部で英語を教えてくださいました。

短期大学時代には、大妻のカナダ・UBCの夏季研修プログラムで二度引率を担当なさり、またこのプログラムの「外国事情」単位認定の委員も勤めてこられました。

平成11年夏、アメリカ在住のお母様の看病に帰国されましたが、お母様が亡くなられた後、体調を著しくこわされたお父様の介護のため、二ヶ月間の介護休暇を取って、アメリカで専心介護にあたられました。

平成12年から、比較文化学部に復帰されました。介護休暇を許可して下さった大妻学院と、それに協力した比較文化学部の先生方に大変感謝なさって、いつかこのご恩返しをしたいと繰り返し言っておられました。12年には、前年の休暇の分を取り戻すかのように懸命に仕事をなさっていました。ウラジオストックでの研究発表をなさり、第2号の紀要の原稿も早々と出して下さっていました。文学部入試のためのリスニングテープの吹き込みもなさいました。ゆっくりとした、少し低めのギルバート先生のお声はしっかりと録音されております。

昨12月4日早朝のご自宅からの火事のため、惜しくも55歳の生涯をお閉じになりました。ご遺族の意向で日本では葬儀を行われず、今はコロラド州のお母様の傍らで永遠の眠りにつかれています。12月20日、比較文化学部教員有志の主催で、「ギルバート先生を偲ぶ会」を行いました。中川理事長、佐野学長、澤田理事がご出席下さり、諸先生方と教えを受けたたくさんの方の学生たちが、お別れに集まりました。すべては、ギルバート先生の善意に満ちた、やさしいお人柄のもたらしたものだと思います。

ギルバート先生は、「ヨナと鯨」についてお書きになりました。ヨナは旧約聖書に出てくる人物で、鯨のような大きな魚にのみこまれましたが、三日三晩の後に甦りました。ギルバート先生は、キリスト教徒でいらっしゃいました。きっと肉体は滅びても、永遠の生命があることを信じていらっしゃったでしょう。「私は、煙にのみこまれただけ。これからもあなた方

の傍にいてずっと見守っていますよ。」と、誰もが忘れることのできない、あのなつかしい微笑をうかべて、学生達をいつも励ましていてくださるように思います。

齊 藤 恵 子

アメリカでのお葬式に際して、比較文化学部からご遺族へお送りした弔辞です。

*December 7 , 2000
Otsuma Women's University,
2-7-1 Karakida,Tama-shi,
Tokyo, 206 Japan.*

To The Family of Professor Linda Gilbert.

On behalf of the Faculty of Comparative Culture I would like to express my deepest condolences on the sudden death of Professor Linda Gilbert. My colleagues and I were greatly shocked to hear of her tragic death that Monday morning.

Linda taught at Otsuma for eight years, the last two of these in our newly established Faculty of Comparative Culture. As a devoted teacher, she was much valued by her colleagues and her students. While teaching English, she inspired in her students a love for the American way of life.

Both staff and students miss her greatly, and find it difficult to come to terms with her sudden and unexpected departure. We will always remember her gentle smile and warm-hearted personality. She would, on occasion, mention her family, and especially her parents, and her love and devotion to them impressed us greatly.

With great grief we bid farewell to Linda today. May her soul rest in eternal peace.

*Keiko Saito,
Professor and Dean,
Faculty of Comparative Culture,*